ベトナム・トーハー焼の製品分類について

Product Classification of Tho Ha Ware in Vietnam

グェン・ティ・ラン・アィン
野上　建紀

NGUYEN THI LAN ANH
NOGAMI Takenori

長崎大学大学院多文化社会学研究科・多文化社会学部『多文化社会研究』 2023年第 9 号　抜刷

ベトナム・トーハー焼の製品分類について

ハノイ大学　グェン・ティ・ラン・アィン
長崎大学　野上　建紀

研究ノート

Product Classification of Tho Ha Ware in Vietnam

NGUYEN THI LAN ANH（Hanoi University）
NOGAMI Takenori（Nagasaki University）

Abstract

About 50 km from Hanoi, the village of Tho Ha is famed for its ceramic of Red River Delta. According to artisans in the village, Tho Ha was one of three oldest ceramic centers from Vietnam with a long-standing ceramic history. Tho Ha ceramic flourished from the 14th century. According to family records of the trade village and archaeological objects discovered, Tho Ha is one of the cradles of ceramic industry. Products of this trade village used to be famous in all the country. From the foundation of ceramic industry to the early 90s of the 20th century, all the villagers live on ceramic. This village was an economic center for ceramic, full of kilns, businessmen, and boats trading in ceramic. Tho Ha ceramic products are inimitable as they are the high crockery, waterproof, and smooth bred-brown color. As time changes, the ceramic - making trade has become the past. Nowadays, Tho Ha is mentioned as an ancient village which well preserves the pure Vietnamese ancient values but not ceramic village.

Keywords: Tho Ha ceramic, oldest ceramic product centers, Red-brown color

はじめに

ベトナムでは「工芸村」という言葉がある。手工芸生産をはじめとする軽工業の分野の個人単位が、村あるいは「社」（村がいくつか集まった行政単位）の範囲で集積し発展した村である。約1000年前にハノイ北東部に出来た窯場が、Tho Ha（トーハー）、Bat Trang（バッチャン）、そして、Phu Lang（フーラン）の３つの窯場であるが、最も成功している工芸村の一つが、ハノイ郊外のバッチャン村である。バッチャンは様々な歴史を経て今日のような大規模な陶芸の村に成長したが、フーランは900年間、赤土を主原料に

薪で焼き上げる製法も、製作物（主に水瓶、骨箱など）も変えることなく、ひっそりと陶器作りを続けてきたとのことである。また、トーハーの伝統的な陶業はほとんど途絶えており、現在復活させるための計画がある。バッチャン村と違い、トーハー焼は衰退していったが、現在、少しずつ復活できるように工芸の保全と開発を目的に進められている計画がある。

本研究は、これまであまり研究対象とされていなかったトーハー焼の形成過程やその製品分類についてまとめて、今後の研究の基礎資料としたい。

地図１　ベトナム全図

地図２　トーハー、バッチャン、フーラン位置図

１．トーハー焼の概要

ハノイから北へ34km、Bac Giang 省（バクジャン）の Cau（カウ）河岸にあるトーハー村は川に囲まれた土地を意味し、ベトナム北部で３番目に大きい歴史のある陶器の街であった。人口は約3,500人、面積は約20ヘクタールである。この村では、ほとんどの家庭がライスペーパー、フォー、ライスワインやキャッサバワインの製造、養豚、養鶏など、昔ながらの仕事で生計を立てている。それに加え、伝統的な家々や建築物が数多く残っており、都会ではすでに失われた古き良きベトナムのノスタルジックな生活風景が広がっている。また、菩提樹、川の船着き場、村の門、1685年に建てられた村の集会所、16世紀に建てられたトーハー寺などもトーハー村の名所として知られる。

北部デルタ地域にある村とは異なり、トーハー村には畑が全くなく、村人は手工芸品や小規模商売による収入で生計を立ててきた。考古学の調査結果により、トーハー村はベトナムの最古の３つの窯場の一つであったことが明らかになっており、トーハー村で生産された陶器は国内で高い評価を与えられ、1990年代初頭までは村人は陶器生産で生活していた。トーハー村の周辺は川に囲まれているため、他の地方へ陶器を運びに行く手段は小船であった。日用品の陶器以外に、レンガなどもトーハーの代表的な製品であり、現在の寺、建物などにはトーハーの建築用陶器が多く残されている。Le Quy Don 学士（レ・クイ・ドン － 黎貴惇・1726-1784）は「大南一統志」(注１) にトーハー村について以下の通り、書いている。

“Đường thông tận cùng tôm cá rẻ
Đất có lò nung chĩnh vại nhiều
Trên bến dưới thuyền như mắc cửi
Lợi nhỏ đi tìm lợi bao nhiêu...”

（訳：トーハー村から他の地方へ移動するのに便利であるし、川に囲まれているため水産物が安い。また、現地は陶器生産の原料が豊富であり、陶器の種類も様々である。その上、売買活動が盛んになるため、経済が活発する）

トーハー陶器は、失敗品も捨てずに、家を建てる際に装飾として利用しているため、現

在も壁にまだ残り、トーハー村の特色となっている。

ベトナムで12世紀ごろに成立した窯場はトーハー陶器、バッチャン磁器、そして、フーラン陶器の３つがあり、手工芸村の記録や考古学調査結果によると、トーハー陶器村はベトナムの最古の窯として認められる。北部デルタ地域でトーハー陶器生産が繁栄したことで、寺院、塔、村の門、荘厳など立派な総合建築物ができた。

トーハー陶器の形成発展史については資料が不足しているが、幾つかの情報がある。まずDo Thuy Binhは、以下のベトナム学のGustave Dumoutierの学説を紹介している。ベトナム陶器は紀元前２世紀から発展してきたが、当初、北部の陶器生産の中心はドア・ケー（Dau Khe）村（Hai Duong省・ハイズオン省）であった。紀元前からはじまる1000年間の中国支配のため、中華文化の影響を受けている。陶器の文様も中華のイメージが強かった。原因は不明であるが、ドア・ケー村の人は生活のため、方々に移民した。バッチャン村に行った人もいたし、Huong Canh村（フォン・カン）に移動した人もいた。1465年ごろ、ドア・ケー村の人は陶器生産用の道具などを携えてトーハー村に移動し、トーハーで陶器を生産しはじめた（Do Thuy Binh, 1967：57頁）。また、トーハー村に移民したドア・ケー村の人のホァン・クァン・フン（Hoang Quang Hung）がトーハーで陶器を発展させたため、トーハー陶器の祖先として認められている（Hoang Ky, 1996：16頁）。一方、他にも伝説があり、大越国（Dai Viet・ダイヴィエト国）は、フア・ビン・キウ（Hua Vinh Kieu）、ダォ・チー・ティエン（Dao Tri Tien）、ルー・フォン・トゥー（Luu Phuong Tu）の３名の技術者を中国の北宋朝（960-1127）に派遣した。派遣が終わってからの帰路、彼らは韶州（現在の広東）に寄り、陶器産地を見つけ、その技術を学んだ。さらに復帰してから大越国にある陶器生産村で学んで技術を広げた。フア・ビン・キウはバッチャン村で白色釉薬の作り方、ダォ・チー・ティエンはトーハー村で黄色・赤色の釉薬の作り方、ルー・フォン・トゥーはフーラン（バクニン省）で赤色・濃い黄色の作り方を広げた。トーハー村は陶器交易の中心地となり、商人、船で溢れていたとのことである。現在、毎年８月14日に陶器祖先に感謝するための行事を開催している。ただし、誰を祖先と崇めているか定かではない。

バッチャン磁器、フーラン磁器と同じように、トーハー陶器は当初、タンロンで多く売られ、特に黎熙宗王朝時代（Le Hy Tong・1680-1705）には、ハノイにあるハー寺で村の陶器を売買し、その利益をハー寺の再建のために寄付している。ハー寺は黎聖宗王朝時代（Le Thanh Tong・1460-1497）に建てられたレンガ造りの寺であり、寺内にはトーハー

陶器の香炉、壺などが飾られている。タンロンで売られて使用され、ハー寺が再建されたことで、広く知られるようになった。そして、トーハー神社にあるベトナム暦チン・ホア（Chinh Hoa）14年（1693）に建てられた石碑には「船着場と市場があり、月に12回陶器の売買を行ったので、村人には収入が入り、安定な生活を送っていた」と記されている。さらに、別の石碑には「市場で陶器が積み重ねられていたが、よく売れた。また村人の家族それぞれが陶器生産のための窯を持ち、秋になると祭りを開催する」と記されている。石碑に記されている情報などを見ると、16世紀頃からトーハー村は活発な経済の中心地であったことが推測され、20世紀に至るまで継続して陶器生産を行った。

そして、トーハでは長い間、家族経営が主体となる生産が行われていたが、1960年代以降になると、雇用労働者として生産を行っていた陶磁器生産者が国有企業に雇用されるか、合作社の構成員として組織化されていった。そのためトーハー村から3㎞離れたカー村でダ・ヴァン合作社（Da Vang）が設立された。合作社で陶器を生産し続けたが、当時の消費者のニーズに合わずに、1988年に解散した。その後は個人経営の生産が細々と続くのみであった。

2005年、トーハー村で陶器を生産する10代目のチン・ダック・タン氏（Trinh Dac Tan）は壺、瓶、ボウル、茶碗、カップ＆ソーサーなどの再生産を実施した。しかし、投資金や設備の欠如のため、産業を回復させるのは容易なことではなく、現在はトーハー村に住んでいる数名の若者が現地の陶器生産を回復するために、技術などを習得し、少しずつ生産を行っている状態である。伝統的陶器生産のための一歩として期待されているが、復活に至るにはまだ遠い道のりである。

フーラン磁器やトーハー陶器はバッチャン磁器と同時期に現れた陶磁器であるが、バッチャン磁器が海外輸出の時期もあったことから、発展の歴史についての研究もいくらか行われている一方、フーラン磁器とトーハー陶器は大半が国内向けの製品であり、その発展の歴史については不明である。

2．トーハー陶器の製品の分類

現在、伝統的なトーハー焼はすでに生産されておらず、生産や流通に関する史料についても不明である。そこで現在、ベトナム歴史博物館で保管する遺物や発掘で出土した遺物からトーハー陶器の特徴についてまとめていきたい。

フーランとバッチャンでは磁器を同時に生産していたが、トーハーでは陶器のみ生産していた。また、トーハー陶器は基本的に無釉である。釉薬をかけないが、焼締によって、精緻な暗褐色の陶器が出来上がる。そして、箸などで軽く製品を叩くと高い金属音を出す。また、違う温度で焼くことで、黄色、赤色、ピンク色、黒色などの多くの色の製品ができる（Nguyen Dinh Chien, 2014：15頁）。そして、バッチャンと違い、トーハー陶器は国内向けの製品を生産した。ベトナム歴史博物館や現地の博物館で残っている製品は大体17～20世紀の製品であり、成形は型を用いていない。また、装飾は手作りによるものであるため、出来上がった製品はそれぞれ異なる。ベトナム歴史博物館で保管する17世紀から19世紀までの製品は種類をみると、装飾用陶器・日用品・飾り物に分けられる。ここでベトナム歴史博物館に展示されているトーハー陶器と現地の個人博物館で保管する製品を中心に撮影した写真を紹介しながらまとめていきたい。

（1）装飾用陶器

ベトナム人の信仰文化においては、祖先は神聖なものであり、死後、子孫が困難に直面するとき、祖先は子孫を助けるし、子孫の成功について祖先が喜ぶことを信じている。この観念はベトナム民族の精神生活に重要な位置を占めている。信仰は継続性があるもので、祀る風習を通して、子孫たちは祖先、人民たちに幸福、健康を与える神、国の平和を与える王、英雄に対する感謝の意を表す。その他に、ベトナム人の共同体においては、祀り信仰は母聖、鎮守の神、台所の神、リンソン母聖などの多くの神聖を祀るので、家庭に置かれる祖先崇拝壇以外、神社、寺などでも崇拝壇を置く習慣がある。バッチャン磁器の装飾用陶器は各家庭の祖先崇拝壇に置かれるが、トーハー陶器の製品は主に神社や寺に置かれる。保管されている遺物を見ると、香炉、ランプ台、塔模型、家屋模型などがある。

香炉は種類が多様であり、香炉台や構造によって分けられ、灰色、煉瓦色など様々な色がある。種類は以下の通りである（図１）。

タイプ１：口と首部が低く、両方の把手が龍形の香炉である。周辺には蓮の模様が付いている。

タイプ２：口が丸く、蓮の花びらの体形で龍形の把手が付いている。

タイプ３：口が丸く、蓮の花びらの体形の香炉である。また台に線が２つ重なり、蓮台のように見られる。

タイプ４：台が楕円で、鳳凰の体形の香炉である。また、他のタイプと同じように台に

線が２つ重なっている。

タイプ５：口が丸く、口から台まで線が重ね、蓮の花びらが付いている。また、龍形の把手が付いている。

タイプ６：口が四角であり、台から口まで線が２つ重なる。座る姿の「ゲ」(注２) が２匹あり、龍形の把手が付いている。

これらのことから、どのタイプも龍や蓮の花弁の模様を中心に構成されており、トーハーの装飾用陶器は文化と宗教に深い関係があることが理解できる。

タイプ１（17世紀）
直径23cm、高36.5cm

タイプ２（17－18世紀）
直径22cm、高42cm

タイプ３（18世紀）
直径26.5cm、高21cm

タイプ４（17－18世紀）
直径25cm、高25cm

タイプ５（17－18世紀）
直径33cm、高29.2cm

タイプ６（17－18世紀）
直径35cm、高35.6cm

図１：香炉（ベトナム歴史博物館より）

トーハーの装飾用陶器には、香炉以外に塔模型、家屋模型なども多くあり、仏教の崇拝壇の装飾物にも使用されている。種類は複数あり､代表的ものは以下の通りである（図２）。

タイプ１：３段の塔模型、２段と３段には屋根形が付き、中央に「卐」の字が描かれる。「卐」の字は古代の宗教では神様の象徴であり、ベトナムの仏教でも多く使われる。

タイプ２：家屋模型で、台は四角である。屋根には曲がった刀が付き、柱が４つ付いている。

タイプ３：家屋模型で四方の屋根が皇帝形であり、丸い屋根角が付いている。また、中層階には花弁、菩提樹、蓮弁の形が付き、台が４つあり高床式のようである。

タイプ４：二つ屋根の家屋模型であり、２階の屋根には「工」字形が付き、円形のレンガが用いられている。

タイプ１
（17－18世紀）
高51cm

タイプ２
（17－18世紀）
台の直径38×34. 8cm
高59. 5cm

タイプ３
（17－18世紀）
台の直径40×36cm
高48cm

タイプ４
（17－18世紀）
台の直径42×54cm
高59cm

図２：装飾用陶器（Gom Tho Ha より）

ランプ台

装飾用陶器では香炉、塔模型、家屋模型以外にランプ台も存在する。保管されている遺物を見ると、主に魚、龍、竹などベトナムの生活にとって大切な霊物をテーマにした作品がよくみられる。

タイプ１:「魚龍戯水」をテーマにしたものである。台座は四角形であり、葉線が付き、レンガ色をしている。

タイプ２：「竹龍」をテーマにしたものである。台座は四角形であり、レンガ色をしている。

タイプ１

タイプ２

図３：ランプ台（Gom Tho Ha より）

ベトナムの伝統的な生活文化においては、火は大事な役割を持ち、現世と冥界の架け橋であるものとして精神的な意味を持っている。ベトナム人はロウソクの光を通じ、祖先に願いことを送り、幸福や健康を祈ることができることを信じている。そして、命日や正月

のときには戻ってくる先祖の霊が迷わないように、目印としてロウソク灯をともす風習がある。そのため、ベトナム人の家族や寺、神社などの崇拝壇にはランプ台がよく置かれる。

（2）日用品

トーハー焼は、瓶、釜、花瓶、鍋、煙管、壺などの日用品も焼かれている。

瓶

トーハーの瓶は他の生産地の製品と比較して器高が高く、確認されている最も高い瓶は約80cmである。瓶の口部が広く、線が付いている。代表的な種類を紹介していきたい。

タイプ１
（18－19世紀）
直径30cm、高79.5cm

タイプ２①
（18－19世紀）
直径22cm、高58cm

タイプ２②
（18－19世紀）
直径22.5cm、高53cm

タイプ２③
（18－19世紀）
直径21.5cm、高42cm

図４：瓶（Gom Tho Ha より）

タイプ１の正面には花と菩提樹が刻印されており、両側には鳳凰の背中に「寿」字が乗せられ、龍形で蓮の花が並ぶ。

タイプ２は複数の模様を組み合わせたタイプである。瓶の首には４枚の花弁と菩提樹の文様が付き、首下部には「壽」字を飲み込む龍頭が付けられている。また、胴部には「壽」字と雲文が付けられる。このタイプには様々なデザインがあるが、代表的な文様は菩提樹、文字である。

花瓶はベトナムの生活に大事な役割を持っており、それは文化に深い関わりをもつ。花瓶はベトナム人にとって、祖先崇拝壇に欠かせない崇拝品の一つである。ベトナムでは各家庭で旧暦の１日と15日に月に２回礼拝などを行い、祖先や神への敬意と感謝の気持ちを送るため、花を飾る習慣がある。その上、祖先崇拝壇に花瓶を置いておくと縁起がよく、また祖先崇拝壇が清廉で威厳をもつものになるとベトナム人は信じているので、古くから花瓶を飾る習慣があったとされる。

釜

ベトナムには昔から娯楽として生活に欠かせないものを表す「琴棋詩畫酒花茶」という言葉があり、その中に飲茶が含まれる。また、飲茶はベトナムでは四芸と呼ばれ、文人のたしなみとされ、画題としてもよく用いられる。茶を飲むとこれまで人生を振り返る願念があり、茶道具がどんどん生産されてきた。当時の茶は大変貴重な物であったため、僧侶や貴族階級など限られた人々だけが口にできるものであった。茶道を通して美意識と融合した自然観を体現することができると思われる。博物館で保管されるトーハー陶器の釜は一つしかなく、他の生産地に比べて多くない。

（18－19世紀）高26cm
図５：釜（ベトナム歴史博物館より）

図５は龍頭形の注ぎ口が付いた五角形の釜で上半分は下半分より大きく、上面には湾曲した枝形の把手が付いている。また、５つの側面には草や龍頭などそれぞれの模様が施されている。

煙管

出土遺物の中には煙管もあり、トーハー陶器が日常生活で使用されていたことがわかる。しかし、煙管は他に資料がないためいつ頃からベトナム人の生活に取り入れられたのか不明である。古くから、タバコを吸うためには銅製のパイプや竹製のパイプなどが用いられていた。生活の一部として、毎日家で使われるし、地方祭りや客の歓迎のときにもよく使用されていた。

ベトナム歴史博物館で保管されている煙管は王朝風の置物でいわゆる「ゲ」形で作られ、頭が上に向かい、煙管面をいくつかに区画し、花草の模様などがデザインされている（図６）。

18－19世紀
長20cm、高14cm

18－19世紀
長19cm、高14cm

図６：煙管（Gom Tho Ha より）

使用する人々によって煙管の種類が違い、口伝によると、農民はパイプ状の長い竹で葉巻を吸った人が多かったとされる。竹のパイプは軽く、畑などで仕事するとき持っていくのも容易であったため、農民の中で流行していた。一方、上流階級の人々が使用する煙管は芸術品として四霊の動物や四君子などの装飾があり、煙管の注ぎ口が金や銀で作られるのも多かった。

植木鉢

トーハー焼は植木鉢も多く生産している。トーハー焼の植木鉢はいくつかの種類がある（図７）。タイプ１は口造りに太い縁があり、台の部分に四つ葉の花草が描かれ、鉢の周辺に菩提樹や龍頭がデザインされたものである。また、タイプ２は口部に縁があり、見込みの中央には菩提樹や龍頭以外、「壽」字も付けている。また、台の部分に花草や「卍」字が刻まれている。タイプ３には六角形の鉢であり、口造りには太い線がある。また、見込み中央と周辺には四君子の松菊竹梅の文様が彫刻され、台の部分には「卍」字も描かれる。

タイプ１
（18－19世紀）
直径31cm、高27.7cm

タイプ２
（18－19世紀）直径32cm、高32.5cm

タイプ３（19－20世紀）
直径22.8cm、高13.7cm

図７：植木鉢（Gom Tho Ha より）

ゲ像

ベトナムの焼き物の人形や像の種類は多様で、観音像・弥勒像の他、馬・獅子・ゲなど各種類の像があるが、トーハー焼で確認されている製品はゲ像のみであり、主に屋根飾りとして利用されていた。一般の建物ではなく､寺や神社を飾るためのものである（Nguyen Dinh Chien, 2014：18頁）。代表的なタイプをまとめていく（図８）。

タイプ１は、四角台に座っているゲ像の頭が上に向かい、尾が背中のほうに曲がる形の姿をしている。タイプ２はタイプ１と同様に四角台にのった座像で、尾が火炎状に曲がっているゲ像である。また、タイプ３は四角台に座っているゲ像であり、尾が背中にカタツムリ状に接するもので、胴体には雲や魚の鱗が付けている。

タイプ１（18－19世紀）
台22.8cm ×20.5cm
高40.7cm

タイプ２（18－19世紀）
高38.3cm

タイプ３（18－19世紀）
台21.5cm×14cm、高43.3cm

図８：ゲ像（ベトナム歴史博物館より）

３．トーハー焼のデザイン

次にトーハー焼の特徴的なデザインをまとめたい。トーハー焼は他の磁器と違い、染付など絵筆を用いた装飾は行わずに、エンボス加工や刻印によって装飾している。製品の見込み中央の模様を全てエンボス加工や刻印技術を使用するのはトーハー焼の特色である。模様のモチーフは、像の各種類、菊・蓮・菩提樹などの仏教的な花が一般的である。特に仏教に深い関係する模様も多くみられる。仏教に関係する模様の中では「三世三仏」が代表であり、寺によく置かれる製品の一つである。仏教的な模様以外、鋸や対角線や装飾的な幾何学デザインもよく刻印される。

「三世三仏」

三世とは、生まれる前の世界、現在生きている世界、死後の世界ということである。三仏とは、生まれる前の世界から送り出してくれる薬師如来、現世で指導してくれる釈迦如来、死後浄土へと導いてくれる阿弥陀如来ということである。トーハー焼の香炉にエンボス加工によって施された三世三仏が蓮台に座る姿のものがある（図９）。

17世紀　広30cm　高32cm
図９：香炉（Gom Tho Ha より）

四霊の動物

四霊の動物は、香炉にエンボス加工や刻印によって施される代表的な動物であるが、香炉の種類によってデザイン、アレンジが異なっている。ベトナム文化では四霊の動物は特別な位置を占めている。四霊の動物は龍、麒麟、亀、鳳凰のことで、ベトナム人は、特に龍は縁起が良い動物と信じられているため、信仰の中で特別な位置を占めている。東洋哲学には龍、亀、麒麟、鳳凰は想像上の動物４種を四霊とみなし信仰する思想があった。そのため、ベトナムの民間信仰には伝統的な観念として、「龍、麒麟、亀、鳳凰」という４匹の動物が権力、永久の力、繁栄などの象徴とされていた。その中で、龍は第一にあり、ベトナム人は龍を権力、繁栄、長寿の象徴としてきた。ベトナムの宮殿、神社、廟、集会所などの建造物には龍の模様がよく刻まれている。宮殿や寺院などの建造物に刻まれた龍は頭をもたげて、口に玉をくわえている姿をみかける。また、龍は名誉、権力の象徴であり、また農作の神として認められるため、もし龍に対し毎年礼拝したら一年中好天になると信じられている。

龍は最高権力のシンボルとされるが、四霊にある麒麟は平安と幸運の象徴とされる。麒麟は不思議な形をし、頭部は龍のように見えるが、全体は動物のように見える。ベトナム人の考えでは麒麟は元気で、忠誠心がある動物とされているため、その姿は神社や王の廟

によく刻まれる。

亀は力と長寿の象徴とされる。亀は不死の象徴で、天地、陰陽の収束を意味すると言われている。亀の腹は地面の象徴であり、背中は空の象徴であるため、亀と龍または亀と蛇を組み合わせると神聖なマスコットになると言われている。また、亀はベトナムの歴史に深い関係の話があり、ハノイ中心にあるホアンキェム湖の中央には「亀の塔」というところがある。15世紀の初頭、ベトナムは北方からの侵略者である明に支配されていた。明からの独立をめざして立ち上がったのが、黎利（レ・ロイ・1385-1433）(注３) という人物である。黎利は神から宝剣を授かってから、明との戦いに大勝利を収め、独立を勝ち取った。皇帝になった黎利が、この湖を遊覧していると、黄金色の大きな亀が現れた。平和が戻ったので、水神に宝剣を還すようにと亀が告げ、レ・ロイが宝剣を差し出すと、亀は剣をくわえて湖にもぐっていったと伝えられる。それ以来、この湖は、剣を還す湖、つまり、ホアンキェム（還剣）湖と呼ばれるようになった。

そして、残る鳳凰について、ベトナム人の考えでは鳳凰は幸運と繁栄の兆しのお告げとされる。龍は王を象徴し、鳳凰は女王を象徴するので、鳳凰と龍を組み合わせて幸福、幸運、長寿を示す。龍と鳳凰の結合は男女の幸福と幸運、繁栄のシンボルとされる。

タイプ１（18－19世紀）

タイプ２（18－19世紀）

タイプ３（18－19世紀）

図10：四霊の香炉（Gom Tho Ha より）

トーハー陶器の四霊の香炉をみると、タイプ１とタイプ２は両方の把手が龍形で、正面には鳳凰、麒麟、亀がある。タイプ１は四霊の動物以外、馬もデザインされている。一方、タイプ２は魚の姿もみられる。また、タイプ３は四霊の動物が両面にデザインされ、龍が二匹あり、後面には麒麟が二匹エンボス加工されている。

17－18世紀　広18cm、長35cm、高31.5cm
図11：香炉（Gom Tho Ha より）

18－19世紀　広50.5cm、高54cm
図12：香炉（Gom Tho Ha より）

図11，図12は丸口や四角口の香炉である。エンボス加工や刻印によって装飾されるのが一般的である。四霊の動物全てを装飾に用いるのではなく、前面に龍、鳳凰、後面に亀がある。図12は正面に飛んでいる鳳凰の背中に「壽」字が乗せられ､左側の龍の背中に「壽」字が置かれている。それ以外に龍と馬の組み合わせもある。龍頭、馬の体と亀の姿を組み合わせている。それは黎中興期（Le Trung Hung、1533-1789）に流行したモチーフであり、「龍馬負図」「神亀負書」というテーマでデザインされる。

ゲ形

ベトナム文化ではゲが大切な位置を占めている。ベトナムのゲは中国の麒麟と違い、犬の化身とされる動物である。犬は賢いし、ベトナム人にとって親友であるし、生活で守ってくれる動物とされる。そのため、ゲ文が描かれる陶磁器などは全て高級品であり、聖地に置かれている。ゲは人を悪魔から守る神として知られているため、よく模様として描かれたり、エンボス加工で表現される。図13は両口に２匹のゲが付けられている。このデザインは17世紀にバッチャン焼にも見られるため、当期のモチーフと考えられる。

17－18世紀
広35cm　高35.6cm
図13：ゲ形が付いた香炉（Gom Tho Ha より）

花草と菩提樹

トーハー焼の代表的な花文は四つ葉のクローバー 、六つ葉のクローバー、蓮、菊と菩提樹などである。花文のデザインはエンボス加工や刻印の技法によって様々な意匠として取り入れられ、人々を魅了してきた。

まず、図14は四つ葉のクローバーが香炉台に線のようにデザインされ、レモンの葉のように見える。トーハー焼では四つ葉のクローバーや六つ葉のクローバーは香炉や花瓶にエンボス加工や刻印で表現されるのが一般的である。花草は陶器の模様としてよく描かれるが、四つ葉のクローバーや六つ葉のクローバーはトーハー焼にだけデザインされている。

図14：香炉（18－19世紀）
長31.5cm　広15cm　高43.7cm

図15：17－18世紀
広40.5cm　直径22cm　高42.0cm

そして、蓮はベトナムの宗教文化に深い関わりがあり、特に李朝（Thoi Ly・1009-1226年）と陳朝（Thoi Tran・1226-1400年）に強くみられる。蓮は様々な形でデザインされている。図15は両方の把手が龍形で、台が麒麟頭の香炉である。香炉本体は蓮の花型で構成され、黎中興期に金で装飾された木製香炉に似ている。図16, 図17 には香炉の口に蓮の花が付けられ、蓮の花とともに組み合わせてエンボス加工された龍は17世紀のバッチャン焼や彫刻される木製品に見られる。蓮の花とともに組み合わせてエンボス加工で施された文様は、このトーハー焼に見られる龍の他に菩提樹などがある。

図16：17-18世紀
広32cm　高29.5cm
（ベトナム歴史博物館より）

図17：17-18世紀
広40.2cm　直径20cm　高40.5cm
（ベトナム歴史博物館より）

装飾的な幾何学模様

四霊、ゲ、花草以外に、トーハー焼にはエンボス加工や刻印する装飾的な幾何学模様もよく見られる。まず、図18は三具足の香炉で、本体のデザインは３つの部分かれている。口部の外側には凸凹型で鋸のような模様が刻印される。この模様は17世紀のバッチャン焼や木製品によく見られるものである。また、図19の香炉には「T」字が刻印されるが、それぞれの位置によって、デザインが異なる。例えば、丸い香炉には口部の外側に刻印される一方で、四角の香炉には台によく刻印されている。さらに平行対角線も多く使用されている。

17世紀
（左）直径18cm　高23cm

17-18世紀
（中）直径18.2cm　高30cm

17-18世紀
（右）広33cm　高29.2cm

図18：香炉（ベトナム歴史博物館より）

17－18世紀

18－19世紀
広40cm　高50cm

18－19世紀
広49.5cm　高62cm

図19：香炉（ベトナム歴史博物館より）

文字

トーハー焼にはエンボス加工や刻印された文字がよく見られる。トーハー焼の代表的な「壽」「卍」字は、エンボス加工、刻印、印判によって表現されることが一般的である。それぞれの文字はベトナム人の生活に深い意味を持っているため、当時の陶器や彫刻などによくデザインされている。

「壽」字はベトナム人の生活の中で特別な位置を占めている。「壽」字は５つの字の組み合わせによって成り立っている。まず、一番上は「士」字である。ベトナムの文化面で「士」とは生徒、学び、知識、考えという意味であり、ベトナムでは長寿のためには学ぶことが大切だと言われている。また、二番目の「工」字は動きという意味で、健康で長寿であるためには毎日運動が必要になる。三番目の「口」は「壽」字の部分であるので普通の「口」の意味ではなく、長寿のためには食生活の方法が大事であり、他人に対して優しい言葉や態度で扱うという意味もある。最後の「寸」字は道徳的判断ということで、自分の生活でよく判断し、扱うのが一番大切であるという意味をもつ。つまり、「壽」は長寿で幸福な生活を送っていくという意味であり、ベトナムの陶器や木製品の彫刻にはよく見られる「壽」字はその願いを表したものであり、霊地によく置かれている。

トーハー焼では香炉が祖先崇拝のために置かれるのが一般であり、「壽」字のデザインも様々である。図20は円形の香炉であり、口部の中央に太陽のように「壽」の字が付けられている。また、図21はエンボス加工された「壽」字に、花草、菩提樹、「T」字と組み合わせるのはトーハー焼の特徴の一つである。また、図12のように草書書体でエンボス加工された「壽」字もトーハー焼だけにみられるものである（Nguyen Dinh Chien, 2014：

23頁）。

図20（18－19世紀）
広39. 5cm　高48. 2cm

図21（17－18世紀）
広31cm　直径18. 2cm　高30cm　（Gom Tho Haより）

トーハー焼のデザインの中で文字以外に、印もある。例えば、よく見られる印は「卍」である。「卍」は「幸福、健康、成功、繁栄」という意味を持ち、幸運の印とされる。「卍」は元々仏教に由来するものであり、他の産地の陶器ではほとんど像の胸に描かれるものが多いが、トーハー焼では香炉にエンボス加工や刻印で表現されたものが代表的なものである。

まとめにかえて - トーハー焼の保全と復活について

トーハー焼の村は、紅河デルタ地域の手工芸村の一つであった。元々、トーハー焼の製品はベトナムの生活文化に合った素朴な特徴を持っていたため、ベトナム国内で使用されていた。現在、トーハー焼は衰退しているが、村では唯一 Trinh Thuy Tien 氏（チン・トゥイ・テェン）の家族が伝統を維持している。トーハー村の陶工は、以前のような工芸村の復活を願っているが、経済的に困難であり、生産工場を作るための用地がないのでなかなか復活する機会がない。村の人によると「現在、たくさん売れていないが、他の陶磁器にはない独自の特徴を持っているため、商売できないわけではない。生産を復活するために生産工場と設備の投資が必要であるが、それが一番難しく、個人では復活したくても費用がない。」という話をしている。生産工場や投資費用がないため、復活したくても、衰退していくのを見守るしかないのが現状である。

伝統工芸を保全し、復活させるためには、さまざまな努力が必要である。個人工芸家の力だけでは難しく、かと言って合作社を設立しても社会のニーズに応えるものでなければ失敗してしまう。官民双方の協力も必要であり、時代に合わせた柔軟力も必要である。そこで伝統工芸を保全するための筆者の意見としてまとめていきたい。

現在、ベトナムの手工芸村はほとんどが個人事業主であるため、生産環境は狭くて不衛生な状態にある。そのため、環境を保全しながら生産を拡大し、発展するには厳しい条件の中にある。衰退したトーハー焼を復活させるには社会資本を充実させ、原料土を安定的に確保し、材料産地におけるゾーニングなど各地域の社会経済開発プロジェクトの一部として計画を作らなければならない。また、貿易と工芸開発は農業生産及び新しい農村建設と同じ方向で実施する必要がある。その上で発展するために、各地域の重点を中心に選択することになる。また、工芸村への資本支援も大事な要素の一つである。工芸村生産の資本を確保するためには、個人事業主が国民の遊休資本を活用することや積極的に資本を拡大することなど社会経済の安定を維持することが必要である。そして、工芸村へ投資し、開発するためには資金源、投資の呼び込み、および資金調達手段を多様化させることが必要である。また工芸村で必要になる設備や原料などを通じ、国内投資家、非政府団体、政府のプロジェクトと連携しなければならない。さらに陶工の技術向上を実施しないと、技術的に他産地に遅れをとることになる。高品質生産を実現するためには、先端技術を実際の生産現場に導入し、適用することが重要である。個人事業主の力だけでは足りないため、科学技術省、商業省、農業省、農業農村開発省の力と合わせる必要がある。

また、就業形態の多様化に向けた能力開発も重要である。各省が大学や短期大学と共同で陶工の能力を向上させ、高度人材育成を目的としたトレーニングコースを開設し、人材育成を支援すれば、伝統工芸を維持でき、発展させられると考える。

最後に、マーケティング戦略を向上させなければならない。製品ブランドを拡大するには国内、海外の市場を探さなければならないが、マーケティング戦略を描ける問屋の存在が生産者と消費者の橋掛けになるのでブランドを広げるチャンスが多くなる。そして、広告戦略、国内外見本市や展示会に参加する活用を通じ、伝統工芸製品の貿易活動を促進することが重要である。

注：

（注１）大南一統志：19世紀末に漢文体で書かれたベトナムの地誌。阮朝の嗣徳（トゥ・ドゥク）帝の命令で編纂が始められ，嗣徳35（1882）年に完成した。ベトナム全土に関する記述であるが，刊本となっているのは，中部ベトナムの部分だけである。

（注２）ベトナム人の伝説上の動物で犬の変身である。また、ベトナム人の「親友」であるため、よく陶磁器など高級な製品に描かれている。

（注３）：ベトナムの後黎朝大越国の初代皇帝（在位：1428年－1433年）

参考文献

1．Đỗ Thúy Bình (1976) “Gốm Thổ Hà trước cách mạng tháng 8”, Dân tộc học, số 4
Do Thuy Binh (1976)「ベトナム８月革命前のおけるトーハー焼」民族雑誌第４号
2．Nguyễn Đình Chiến (2014) “Gốm Thổ Hà thế kỷ 17-20” Nxb Văn hóa-Thông tin.
Nguyen Dinh Chien (2014)『17世紀－20世紀におけるトーハー焼』通信文化出版社
3．Trần Khánh Chương (1990) “Nghệ thuật gốm Việt Nam”, Nxb Mỹ thuật
Tran Khanh Chuong (1990)『ベトナム陶器の芸術』美術出版社
4．Trần Quốc Vượng (2002) “Làng nghề thủ công truyền thống Việt Nam”, Nxb Văn hóa thông tin
Tran Quoc Vuong (2002)『ベトナム工芸村』通信文化出版社
5．Trần Minh Yến (2004), “Làng nghề truyền thống trong quá trình công nghiệp hóa hiện đại hóa”, Nxb khoa học xã hội.
Tran Minh Yen (2004)『工業化・近代化における工芸村』社会科学出版社

なお、本文はグェンが主に執筆し、野上が日本語の修正と校閲を行った。